

「紳士」⁽¹⁾ という理想像の誕生と展開

—— 近代日本の礼儀作法書にみる ——

竹 内 里 欧

0 はじめに

明治期以来の文学作品には、『浮雲』（二葉亭四迷・1887-9）、『金色夜叉』（尾崎紅葉・1897-1902）、『雲のゆくへ』（徳田秋声・1900）など、「西洋化」や世俗的成功を体現する人物として、「紳士」という人間像が重要な役割を演じている作品が多い。日本の近代化の牽引力には、「西洋文化」への憧憬が大きな要素となっているが、「紳士」は、上記のような文学作品にとどまらず、社会の様々な面で、まさに、「西洋化」・「近代化」を象徴する人物として理想的人間像の機能を果たしてきた。実際、明治・大正期の礼儀作法書には、「紳士」という人間像が頻出する。礼儀作法書という資料から浮かび上がる「紳士」像は、理想像の典型を示すものとして、社会において尊敬される行動様式、守るべき規範を反映している⁽²⁾。クラブは、このように、人々の関心の対象や参照項となる人間像を、「社会的タイプ」[Klapp 1962=1977]と称し、それが社会を分析する際の指標になりうるとしたが、「紳士」とは、まさに、近代日本における「西洋化」の過程を探求する上で見過ごすことのできない「社会的タイプ」の一つ⁽³⁾と言える。

⁽¹⁾ 本稿で「誕生」と「展開」について分析する「紳士」とは、「ジェントルマン」の訳語として「誕生」し、明治・大正期に、一つの理想的人間類型として「展開」した「紳士」である。「紳士」という言葉自体が、明治期以前に全く存在しなかったと言っているわけではない。例えば、『新編 大言海（新編版）』（1982）には、「紳士」について『福恵全書』での使用例が挙げられている。『福恵全書』は、清朝の地方官への心得を記した書で、徳川時代に武士階級を中心に読まれた[佐伯 1975: 1]。

⁽²⁾ 「紳士」という理想の担い手は誰であったかというのは重要な問題である。どのような文脈で使われているかによって想定される担い手も異なるが、分析に用いた、社交術や交際術のような性質の作法書においては、「紳士」という理想像の担い手として、社会的成功により上昇移動を目指している男性、もしくは、既に、上～中流にいる男性が想定されていると思われる。

⁽³⁾ 近代日本においては、「紳士」に限らず、「豪傑」、「壮士」、「ハイカラ」など、様々な「社会的タイプ」が存在した。しかし、その中でも、「紳士」は、特に、「西洋化」・「近代化」を象徴する理想的人間像として、ある程度長期に渡って礼儀作法書に登場する存在であり、「西洋」への牽引力を研究する上で非常に有効な存在と見なせる。そのような意味で、本稿では、「紳士」という「社会的タイプ」に特化して分析を進める。

「西洋化」の過程は、社会学が解くべき問題群の内の一つである。従来の「西洋化」に関する研究において、「西洋化」の牽引力となる具体的人間類型に焦点を当てた研究は、あまり行われていない。また、「西洋文化」の受容や反発に関して、その過程の内に如何なるメカニズムが作用していたかという、生成的側面は看過されがちであった。従って、本稿では、「西洋化」・「近代化」を象徴する人間像として機能した「紳士」を手がかりにすることにより、「西洋文化」受容にあたって、どのような力学が働いていたかを重視して分析する。資料は、主に明治期から大正期にかけての礼儀作法書⁽⁴⁾を中心に、雑誌記事、新聞、雑本、辞典なども適宜参照する。

1 先行研究の整理・分析の視角

イギリスのジェントルマンを主題とする研究は、越智武臣[1966]、川本静子[1973]、村岡健次[1980]、村岡健次他[1987]、川北稔[1993]、安川哲夫[1995]、織田元子[1999]、山本正[2000]など、イギリス史、英文学、西洋教育史の文脈で多数行われている。特に、近年の、日本における近代イギリス史研究においては、「ジェントルマン」の文化的側面に注目した研究が多く行われている。これには、戦後日本において、高度経済成長を経る中で、「近代化・資本主義化の模範をイギリス近代に求めるという問題意識」[山本 2000: 5]がリアリティを失い、そうした中で、「ヨーマンが市民革命を成功させ産業革命を達成した」という、いわゆる「大塚史学」が衰退し、代わって、トーニーの研究に影響を受けた越智や村岡、川北らによる、「ジェントルマン」という文化理念に注目した研究が台頭してきた、という背景がある[山本 2000: 3-7]。

一方、近代日本の「紳士」に関連した研究には、鹿野政直[1969]、永谷健[1992]、藤岡洋保他[1995]、杉浦章介[1993]、平田玲子[1998]、D. Ambaras [1998]、小峰和夫[2001]など、思想史、社会階層研究、国文学などの文脈で行われているものがある。これら先行研究を大まかに二つに分けると、実体としての「紳士」に着目したものと、人間像や表象としての「紳士」に着目したものがあると言える。前者としては、藤岡他[1995]、杉浦[1993]、小峰[2001]など、『紳士録』を材料に、実証的なデータ分析を行っている研究がある。それに対し、後者には、鹿野[1969]、永谷[1992]、平田[1998]、Ambaras [1998] が含

⁽⁴⁾ 「礼儀作法書」の分析にあたっては、国立国会図書館図書部編[1994][1998]を中心に、大阪府立図書館、国立民族学博物館所蔵の作法書、個人の所有する作法書などをも適宜参考にし、明治期から大正期にかけて、「紳士」や「西洋」に関連する作法書55冊（明治期34冊、大正期21冊）を参照した。『国立国会図書館蔵書目録』を使うにあたっては、国立国会図書館図書部編[1994]の「礼儀作法」の項目、国立国会図書館図書部編[1998]の「礼儀作法、社交」の項目を主に参考にした。

まれる。これらの、表象や人間像としての「紳士」を扱う⁽⁵⁾という、本稿のテーマに近い研究について、触れておこう。鹿野[1969]は、思想史的関心から、蘇峰の「田舎紳士」論について分析している。永谷[1992]は、明治後期から大正期の雑誌記事を対象に、上流階級イメージを総合的に分析している。その中で、「紳士」という表象が使われ始めたことに、経済エリートへの威信付与を見出している⁽⁶⁾。また、Ambaras [1998] は、明治後期の、都市化した新中間層について分析を加えている。しかし、これら先行研究において、理想像としての「紳士」に関して、実際に、どのような規範や行動様式が「紳士」の条件とされたのか、ということについての検討はほとんど行われていない。このような問題関心においては、平田[1998]が優れた知見を提供している。平田[1998]は、書籍、新聞、雑誌を資料に、社会的に成功をおさめた「紳士」と、成功の途上にある「書生」の対蹠的な関係を分析した。しかし、平田は、文学作品を中心的な資料として用い、「書生」と「紳士」の対峙的關係を抽出することに重点をおいており、礼儀作法書における「紳士」や「紳士」をめぐる語句やレトリックについては、あまり詳しい検討を行っていない。従って、小論は、平田の視点や分析を参考にしつつも、礼儀作法書一般の中で、「紳士」がどのように位置付けられるかという観点から、「紳士」という人間像のあり方や、「紳士」の周辺に頻出する語句を分析し、「紳士」をめぐる社会的力学を抽出することに重きを置いて分析を試みたい。

ここで、研究手法についていくらか敷衍しておく。西洋社会におけるジェントルマンを考察する際には、「身分」、「階級」といった概念を考慮に入れることが不可欠である⁽⁷⁾。ウェーバーは、「階級状況」を、「財貨の調達」、「外面的な生活上の地位」、「内面的な生の運命」によって特徴づけられるとした[Weber 1956=1970: 207-8]。ウェーバーによると、「階級」が同一の利害状況にあるということを示しているのに対し、「身分」は社会的評価

⁽⁵⁾ 本稿では、主に表象としての「紳士」を扱ったが、その背後には、階層の問題がある。今後は、特に、明治後期～大正期に増大した新中間層を対象に、職業・地位・所得といった方面からのアプローチの採用や接合を考える必要があるのではないかと思う。

⁽⁶⁾ 以下を参照。「奸商」に高貴なイメージが付与されたことは、まず、彼らがこの時期から「富豪」として言及されると同時に、「紳商」あるいは「紳士」という呼び名で頻繁に呼ばれ始めることから窺える。[永谷 1992: 200] (下線引用者) また、永谷は、<泥棒紳士>イメージなど、経済エリートに対する非難や違和感の表明についても指摘している。

⁽⁷⁾ ここで補足しておきたいのは、イギリスのジェントルマン像も、決して「身分」や「階級」という要素にのみ還元されるようなものではなく、融通性や曖昧性を含んだ複雑な概念であったということである。例えば、村岡[2003]など参照。村岡は、「ジェントルマン」という概念について、「支配階級」としての「ジェントルマン」、「人間類型」としての「ジェントルマン」、「名辞」としての「ジェントルマン」などに整理し、それらの歴史的変化を検討している。ただし、徳性や人格などを主要素とするジェントルマン像を把握する際にも、その背後には、「身分」や「階級」としての「ジェントルマン」がひかえており、それへの憧憬や反発、相互の影響などを視野に入れることが不可欠となる。

に関する特権を表している。即ち、「身分状況」は、生活様式、教育方法、出自や職業による威信によって特徴づけられ、実際には、通婚権や、食卓を共にすること、ある種の営利を独占・忌避することなどによって表現される[Weber 1956=1970: 214-5]。しかし、外発的な「近代化」に特徴づけられる近代日本において、「西洋文化」の受容は、実際の局面においてはむしろ平等ではないが、原理的には平等に開かれており、誰もがアクセス可能であるかのような理想として機能した側面が重要である。従って、「身分」、「階級」といった概念からアプローチを行うことは、必ずしも適切とは言えない。このように考え、本稿では、「紳士」が、身分概念や階級概念というよりも、クラブのいう「社会的タイプ」として機能した面に焦点を当てる。「社会的タイプ（モデル）」⁽⁸⁾とは、「模倣したり回避したりすることによって、ある場合は肯定的な意味で、またある場合は否定的な意味で、人びとを動かす指針となる人物像」[Klapp 1962=1977: 1]であり、ル・ボンの「群集概念」やデュルケムの「集合表象」のように、「集団によって形成され用いられる役割行動の集合的規範」を体現している[Klapp 1962=1977: 22]。本稿では、クラブの視点を参考に、「社会的タイプ」としての「紳士」という側面に注目し、その生成と展開について分析を進める⁽⁹⁾。

2 「紳士」という概念の登場と流布

2-1 「紳士」の創出

言うまでもなく、「紳士」は、gentlemanの翻訳語である。ジェントルマンとは、『高貴な人』 *gentilis homo*」に由来[山本2000: 9]する、近代イギリスの支配者層を指す概念であった。狭義の身分概念としては、貴族とジェントリ階級出身者を指す[織田 1999: 6]が、ジェントルマンの定義は、弾力性や融通性を有しており、身分と人格の要素が錯綜し、混乱と論争が絶えなかった。端的に述べれば、ジェントルマンとは、「身分・能力・人格すべての統合された理想的指導者像」[織田 1999: 4]ということになる。時代とともに広範囲に広がり、19世紀半ばには、「ジェントルマン化意識」は「中流階級のエー

⁽⁸⁾ 「社会的タイプ」と「モデル」は、同等のものとして扱われている場合もあるが、厳密には、次のように区別される。「タイプは抽象概念であるが、モデルは絵画、彫像、ドラマの役割、物語、実在の人物などいずれの形をとろうが、ある観念の意味を十分具体的に例示する、つまりはっきりと指示するものである。」[Klapp 1962=1977: 272]

⁽⁹⁾ なお、以下の分析においては、読みやすさに配慮し、引用の旧漢字・旧仮名遣いを、新漢字・新仮名遣いに適宜改めている。

トス」[村岡 1980：124]と化するようになる。英国社会において、ジェントルマンは、固有の「目的価値として措定された文化理念」[越智 1966：319]であった。また、安川[安川 1995：i ~ iv]が述べているように、近代人の理想型の一つとして世界的規模で理想とされる人間像でもあった。

それに対し、明治期に広範に流布した「紳士」は、gentlemanに対応して編み出された言葉である⁽¹⁰⁾。

1903（明治36）年に出版された『紳士読本』（上島長久）には、「従来我国にも紳士に宛て嵌まる人物は有ったに違ひ無いが、今日世間で唱える意味に、紳士と云う名前を用い始めたのは、畢竟維新以来、欧米諸国と、交りを結んでからの事であつて、紳士と云う言葉は、英語のゼントルマンを翻訳したものである」（17～8頁）という記述がある⁽¹¹⁾。

また、幕末から明治初期の英和・和英辞書をいくつか参照すると、例えば、『英和对訳袖珍辞書（初版）』（1862）では、「Gentleman, s. 歴々ノ人.重々シキ人.君男ノ尊称」（328頁）とされている。『和英語林集成（初版）』（1867）では、「GENTLEMAN, Kunshi.」（40頁）となっており、「紳商」や「紳士」などの語は使われていない。『英和辞書 新訳無双（第二版）』（1891）には、「Gentleman」は、「紳士 相公、大人、先生」（251頁）というように説明されている。gentlemanに対する訳語として、初期には、「君子」、「大人」、「相公」、「先生」、「紳士」といった様々な語句が当てられているのが分かる。また、『和英語林集成』の版を通時的にみていくと、和英（日本語から英語を引く方）の部分の見出し語として「SHINSHI」（＝「紳士」）という語が初めて登場するのは、3版（1886）である⁽¹²⁾。

「紳士」の初出について、はっきりとした時期を確定するのは難しいが、1901（明治34）年9月16日の『二六新報』第1030号の記事、「映し出す紳士の起原」⁽¹³⁾の以下のような記述が参考になる。

⁽¹⁰⁾ 『新訂 大言海（五十六版）』（1978）には、「紳士 [英語、Gentlemanの訳語、郷紳の士の略]」とある。

⁽¹¹⁾ また、同書では、「紳士」という訳語の成り立ちについて、「漢語の縉紳の士」からわりだした（25頁）と推定している。

⁽¹²⁾ 『改正増補 和英和語林集成（三版）』（1886）には、「SHINSHI シンシ 紳士 n. A great man, in wealth or influence.」（575頁）とある。また、同書では、「KUNSHI」（＝君子）の英訳の項目に、gentlemanがある。なお、通時的に参照した『和英語林集成』について詳しく記すと、初版：「日本横浜梓行、Shanghai: American Presbyterian Mission Press、1867年刊」、第二版：「日本横浜梓行、Shanghai: American Presbyterian Mission Press、1872年刊」、第三版：「日本東京 丸善商社蔵版、1886年刊」である。

⁽¹³⁾ この記事については、永谷[1992：200]、平田[1998：44]などが指摘している。また、研究に際して両分析から示唆を受けた。

「紳士という言葉今はザラに遣えど、此言葉が現在の意味を以て産れ出でたは明治十二年の事という、其頃渋沢益田なんと云える一種の商人漸く社会に権力を振り、時の政府の御覚えも芽出度ければ民間の信用も厚く、万般の経済事業此一派の手を借らざるはなく宛ら旭の昇る勢（中略）間もなく米国大統領ゼネラル、グラントの来遊あり、工部大学校に之れを迎えて盛宴を催し（中略）福地が日々新聞⁽¹⁴⁾に自画自賛の大喇叭を吹立てに、豪商というも大買というも面白からねば、英語のゼントルマンに当はめて紳士紳商という熟字を作り、此一派の人人の姓名の上に冠せたり、紳士の起原まッ此通り」（下線引用者）

しかし、管見の限りでも、例えば、「読売新聞」において、グラント訪日（1879年6月長崎着）より早い1879年4月30日に、「紳士」という語句が用いられた記事⁽¹⁵⁾が存在することが確認された。その他にも、1878（明治11）年に発行された『欧洲奇事 花柳春話』（リットン、丹羽純一郎訳）に、既に「紳士」という語が使われている⁽¹⁶⁾。従って、はっきりとした時期を特定することは難しいが、明治10年代前半頃には、ジェントルマンの訳語として「紳士」が用いられ始めていたと思われる。

一方、堺利彦ら社会主義者によって、bourgeoisの訳語として「紳士」（「紳士閥」）という語が採用されることもあった。「新聞紙と紳士閥」（週刊『平民新聞』第57号・1904年12月11日）で、堺は、「紳士」を侮蔑的なニュアンスで用いている。堺は、「壮士」が「墮落書生の代名詞」となったように、また、「文士」が「柔弱なる小説家連の別名」となったように、「紳士」も「腐敗せる上流社会」を表すのに適切な言葉になってきたと断じている。その中で、堺は、『共産党宣言』を訳出する際、「紳士」という言葉を用いたと述べている。こうした使用は、（先の『二六新報』の記事で言及された）『東京日日新聞』の「紳士」像の反転した形態と言えよう。

また、「紳士」について、その定義や性質について論じた記事は、「紳士論」（『日本人』1890年1月18日・12～3頁）、「紳士とは何ぞ」（『国民之友』1896年9月12日・3～6頁）、「紳士」（『日本人』1902年8月20日・38～41頁）、「短文 紳士と云うことの定義」（『中央

⁽¹⁴⁾ 実際、この記事にあるように、当時の『東京日日新聞』には、グラント接待の文脈で「紳士」という言葉が使用されている（例えば、「雑報」『東京日日新聞』第2275号・1879年7月8日など）。

⁽¹⁵⁾ 「昨日ハ午後より萬世橋外の昌平館にて田中文部太夫が会主にて音楽会を催されお雇教師のモウルス氏を初め府下の紳士が数人参会されて余ほど盛で有ました」（下線引用者）（『新聞』『読売新聞』第1283号・1879年4月30日・朝刊1面）。

⁽¹⁶⁾ 「……当時有名紳士ノ商議場タルガ如ク皆ナ此家ニ来訪シ……」（下線引用者）（リットン、丹羽純一郎訳・1878→1972・73頁上段）。

公論』1902年8月・81～3頁)、「紳士とは何ぞ」(三宅雪嶺・『日本及日本人』1913年1月1日・25～46頁)など、多く見られる。こうした記事からは、明治中期～大正期にかけて、「紳士」という概念が、社会に受容・流布していく様子が分かる。

2-2 社交団体の登場・「紳士録」の創刊

1880年には、「日本初」⁽¹⁷⁾の「紳士」の社交団体である交詢社が創設された⁽¹⁸⁾。「交詢社」とは、1880(明治13)年1月、福沢諭吉を中心に設立された、相互啓蒙的な社交団体である。社員は、慶応義塾の関係者を中心に、銀行家、地主、会社員など、東京在住者から地方在住者まで多数に及び、発会当時は1767名であった。初期は教育的性格が強かったが、福沢諭吉の死後、鎌田栄吉に運営が任されるようになってからは、親睦の要素が強くなる。「新橋ステーションの開設」以来、「首都の玄関口」として装いを新たにした銀座に位置し、レンガ造りの建物において、「近代的な人間交際」が目指されていた[交詢社編 1983: 31, 60]。交詢社については、人物評で知られた鶴崎鷺城により、以下のように描写されている。

「(引用者 交詢社について) 中等階級の上の部に属する紳士を網羅し、政府に關係あるもの尠く、いづれも政界及び財界(ママ)に活動しつゝある『時の人』なり。其品質に於て民間第一流の社交俱樂部たるを失わず。」(鶴崎鷺城・「交詢社論」『中央公論』・1913年5月号・74頁)。

「交詢社」を初めとして、社交クラブは、「東京倶楽部」(1884)、「日本倶楽部」(1898)、「東京ロータリークラブ」(1920)など、続々と出現した[交詢社編 1983: 43-4]。一方、1889(明治22)年には、人名・職業・住所を網羅した『日本紳士録』が創刊された。『日

⁽¹⁷⁾ 「交詢社」は、「身分や職業学歴」に制限をつけないという意味で、「日本初」の社交クラブであるが、それ以前にも社交クラブをつくろうとする試みや、身分や職業を限定した、社交クラブの前身のようなものの設立はあった[交詢社編 1983: 43-4]。なお、この節(「2-2 社交団体の登場・「紳士録」の創刊」)は主に、交詢社編[1983]を参照している。

⁽¹⁸⁾ サイデンステッカーは、「交詢社」のような社交団体と「紳士」という人間像の連関について、以下のように述べている。「銀座にはまた、日本で初めてイギリス式のクラブも出来た。明治十三年、福沢諭吉の作った交詢社である。文明開化を説いてもっとも大きな影響力を発揮した福沢が、雄弁術の必要性を強調して三田に演説館を建てたことは前にも述べたが、福沢はまた、紳士として打ち解けた社交的会話の術を学ぶ必要があると考え、友人たちの資金援助を得て交詢社を創立したのである」[Seidensticker 1983=1992: 274] (下線引用者)

本紳士録』では、「紳士」の定義として、「所得納税者」を基礎に、約25000名を「紳士」として網羅した[交詢社編 1983：220]。このように、「紳士」のための社交団体がつくられたことや、紳士録が発刊されたことから、「紳士」が、威信を体現する理想的人間像として機能し始めたことがうかがわれる。

それでは、この「紳士」という理想的人間像とはどのようなものだったのだろうか。次節において、理想像としての「紳士」について、礼儀作法書を主な資料として検討する。

3 礼儀作法書にみる「紳士」

ここでは、単に「紳士」について如何に書かれていたか記述するのではなく、「『西洋』に対する反応」という問題関心に即して、新しい風俗や文化の秩序化の過程という観点から、「紳士」に関連する礼儀作法書の言説⁽¹⁹⁾の変遷をたどることにしたい。

3-1 礼儀作法書の分析——「西洋化」のプロセスの一つとして——

明治期以来、外国人との接触や、洋装などの新たな文化や風俗に対して、礼儀作法の案出や採用、再編が行われる。「立礼」の採用⁽²⁰⁾や、「礼法講習会」の取り組み⁽²¹⁾、雑誌の記述⁽²²⁾によっても、その一端をうかがい知ることができる。ここでは、「西洋文化」を単に導入・紹介するということに重点がおかれた「A 明治初期～中期」と、「西洋文化」の知識の度合いによって「差異化」する動きが強く見られるようになる「B 明治後期～大正期」に大まかに分けて検討する。

⁽¹⁹⁾ 礼儀作法書の読者が誰かということは重要な問題である。本稿では、読者の階層や性別などを一旦捨象した上で、それらに共通に抱かれている「紳士」イメージについて考察したが、読者の問題については、今後の課題としたい。

⁽²⁰⁾ 以下の記述を参照。「維新の後万国の交際日に開け礼服の制拝礼の式皆時世の適宜に従いて制定せらるゝに当り復た立礼の作法に需つものありて不肖忠雄小笠原清務氏と共に東京女子師範学校に於て立礼式取調の命を荷す」(小笠原清務・1883・水野忠雄による「緒言」)

⁽²¹⁾ 「礼法講習会」は、明治34年、下田歌子などを中心に発足し、家庭の礼法から婚葬儀まで、儀式作法を教えるべく活動し、神前結婚式を普及する母体ともなった[南博他編 1986：64・75, 507・8]。

⁽²²⁾ 例えば、「行儀作法の廃頹」(新渡戸稲造・『中央公論』・1907年8月・22～5頁)は、当時の世相に対して、「行儀作法の乱れた一点」において、「確に悪くなった」とし、その原因の一つは、「椅子や卓子に倚って小笠原流の行儀も保つことが出来ぬ、洋袴を穿いて三拝九拝も似合わぬ、さらばと言うて純粹の西洋的の礼儀も行われない」というように、「生計の態が違って来た」ことにあるとしている。

A 明治初期～中期

明治初期から中期にかけて、翻訳の礼儀作法書が多数刊行され、「西洋文化」の導入や紹介が行われた。

『欧米礼式図解』（ハウトン、北村金太郎訳・1886）では、維新以来の世相について、「上等社会」の家屋や衣服の洋風化を例に、「本邦の制度文物一として欧米各国に模倣せざるものなし」であるのに、「日常行事内外交際の儀節」の知識が等閑に付されていると批判し、「英仏米各国普通一般に行う所」と「予の親しく見聞する所のもの数項」を翻訳したとある（緒言）⁽²³⁾。このような翻訳書では、未知の上流の習俗や文化を、単に「紹介」という立場がとられている。訳者自身が、記述にある文物や習俗を直接目にしたことがないことも多い。例えば、『当世儀式』の翻訳を基にしたという『英国交際儀式』（渡辺豊記述・1879）は、「西国の儀風を窺う」ことに役立つようにとの意図で出版されたものであるが、著者自身は、「未だ曾て欧米の社会に接し、其の儀風を目撃（ママ）せず」と述べている（緒言）⁽²⁴⁾。従って、明治初期の翻訳の作法書においては、従来日本に存在するものを説明に使うなどの苦肉の策がとられていることも多い。例えば、敬礼についての記述は、「途中又は夜会宴会などにて友人に出逢うとき『ヤー後藤達者カー』（“Ah, Godfrey, how d'ye do?”）など、高声を発して其名を呼ぶべからず」（チェスターフィールド、首藤新三他訳述・1886・3頁）であるし、また、出産後の儀式についての記述は、「誕生の後ち二週日を経るの日に至り母子共に健康無事なるときは其父別懇の友を迎えて宴を催し且つ長幼を誘て^{ヤキパン} 炕麵包 我が赤飯のごとしを賀食せしむるの風習を存せり」⁽²⁵⁾（高橋達郎抄訳・1887・15頁）といった調子である（下線引用者）。

明治初期～中期にかけては、開化の必要から、「西洋文化」について輸入・紹介するという「動機」で、礼儀作法書が多く編まれている。ここでは、「西洋文化」の知識の差異によって、「恥をかく」という視点、あるいは逆に、「威信が付与される」という視点が、あまり強調されていないという点に注意したい。

B 明治後期～大正期

明治後期から大正期には、「交際」、「社交」といった時代のキーワードが、礼儀作法書

⁽²³⁾ 引用はカタカナで表記されているが、読みやすさを優先し、ひらがなに改めた。

⁽²⁴⁾ 引用はカタカナで表記されているが、読みやすさを優先し、ひらがなに改めた。

⁽²⁵⁾ 引用はカタカナで表記されているが、読みやすさを優先し、ひらがなに改めた。

にも台頭し⁽²⁶⁾、内容的にも、『社交談話法』（W. Carlton、笛川漁郎訳・1907・玄黄社）、『交際と応対』（蘆川忠雄・1910・至誠堂）、『社交要訣 是だけは心得置くべし』（加藤美侖・1918・誠文堂）、『人に好かるゝ交際の仕方』（徳永順二・1923・好文社書院）など、「社交」をテーマにした、交際術や成功術のような性質の作法書が多く存在する。

B-1 交際術・成功術・人心看破術

『西洋男女交際法』（宮本桂仙・1906）では、礼儀作法もまた、「文化の進運」に応じて変化を避けられないとし、時勢に合った礼儀作法の必要が主張されている。「艶を競い其麗を争う実には一種の戦争を演じつゝ、快哉声裡に敵の弱点を見出すような、交際に巧みであることが評価される「欧米社会」に対し、元来「日本社会」は交際術が拙ないと批判し、「儒者の所謂『巧言令色之れ（ママ）鮮^{すくな}矣」との倫理」は、「陳腐」であり、既に必要ないと断じている（序）。また、『人をチャームする応接の仕方』（石角春洋・1921）は、当時の世相について、人々が、「自家保存の理法に因って悪しきを避くるために其意を明かにせず掛引を為すのが常である」（182～3頁）と述べ、「人心観（ママ）破的交際術」の必要を説いている。このように、成功を目的とし、行動の指針を与えるものとしての作法書が多く出版されている。

交際術・成功術としての作法書においては、「西洋文化」に関して詳しい知識のあることが大きな意味を持っている。『交際術修養』（1909）は、蘆川忠雄による著作である。蘆川は、明治後期から大正期にかけて、『交際と応対』（1910）、『社交宝典くあれ』（1920）など、交際術や成功術に関する作法書において著名な作家である⁽²⁷⁾。『交際術修養』は、「世路の経験に乏しき幼稚なる青年」（例言1頁）に対して、立身出世に役立つ交際術の条件を指南することを目的に書かれている。従来の作法書について、「所謂『公私礼法』若くは『男女礼法』の類著にして、日本従来の習慣たる小笠原流の礼法を説くものと大差あ

⁽²⁶⁾ 礼儀作法書の題名について、明治後期には「交際」、大正期には「社交」という語句が台頭している。詳しくは、竹内[2002]参照。ここで少し補足する。本の題名は、時代精神を探る一助となりうるが、当時流行の思潮の従属変数となっている可能性、時代のキーワードを使うことにより、需要を創出するという可能性には留意すべきである。また、分析の際用いた『国立国会図書館蔵書目録』は高い網羅性を有しているが、当時の礼儀作法書全てを網羅しているわけではない。従って、題名の変化については、質的分析において扱う礼儀作法書の網羅性を補うという意味で必要な一つの大まかな指針と考えている。故に、題名の変遷の傾向を一つの目安として、内容と照らし合わせたさらなる吟味が必要となるのは言うまでもない。

⁽²⁷⁾ 広告にも、「新時代に於ける成功の鍵 蘆川忠雄先生」と紹介されている（『社交宝典くあれ』（蘆川忠雄・1920）の広告欄より）。

らず、此の如き書は果して何の益をなすべきか」（例言 2 頁）と批判し、慣例や旧習を廃し、臨機応変の作法が必要であると強調している。晚餐の時間などは、各自の判断で決めればよいものであり、作法書によって何時と決めるようなものではないといった記述が目につく。また、蘆川は、交際術は天賦の才に属し理論化すべきではない、という意見に対して異議を唱え、鍛錬の有効性を主張し、「交際術は一種の技術なり」（10 頁）と断定する。「交際術」として、「談話」、「儀容」、「高潔なる趣味」、「応接室の設備」などについて、多くの頁が割かれている。また、ナイフとフォークの使い方（204～5 頁）、模範的紳士としての英人の例（318～9 頁）など、洋風の文化やマナーについての知識が、交際術において重要な位置を占めていることが分かる。「西洋文化」の知識が重要な役割を演じていたことは、『交際規箴 なかれ』著者（蘆川 引用者）が数年の心血を濺ぎ欧米に於ける最新の社交様式を折衷工夫し……新社交術を創始し提唱せるもの」というような、作法書の広告⁽²⁸⁾の文面からもうかがわれるのである。

このように、人間関係の技術や理想像を教えるものとしての作法書が多く出版されてきているが、その際、「西洋」に関する知識の有無や程度が、一つの参照項として大きな意味を有している。そして、人間関係の技術や人心看破的な交際術を教示する上での理想像として、「紳士」という人間像が立ち現れてくるのである。

B-2 理想像としての「紳士」

「B-1 交際術・成功術・人心看破術」に述べたような、「交際術」・「成功術」としての作法書における理想像として、「紳士」という人間類型の台頭・定着⁽²⁹⁾が見られる。

例えば、先に述べた『交際術修養』では、交際術の要件として「親切」や「服装」、「社交」、「円満」などと並び、「紳士淑女」（317 頁）であることが挙げられ、「英国紳士の常識に倣え」（110～1 頁）、「紳士淑女たるの決心を抱け」（318 頁）などの項目に、「紳士」という理想像について論じられている。また、『紳士と社交』（波多野鳥峰・1908）は、社交的に成功するためには「紳士」であるように努力することが重要だとし、洋服の手入れや

⁽²⁸⁾ 『社交宝典くあれ』（蘆川忠雄・1920）の広告欄より。

⁽²⁹⁾ 明治初期の翻訳物などの作法書にも「紳士」という語は使われている。しかし、初期の「紳士」が、翻訳した文章の中で単にジェントルマンの訳語として当てはめられているものであったり、一般的な男性を表す代名詞として用いられていたり、ジェントルマンの西洋での歴史を語る文脈で使用されていることなどが多いのに対し、後の「紳士」は、翻訳ではない作法書でも多用されており、また、「日本の紳士は……であるべし」、「（当時の日本社会の中で）栄達するためには紳士として……のように振舞うべし」といった文脈での使用がよく見られるなど、近代日本社会の中で、一つの「理想的人間類型」としての位置を確立したものとして扱われていることが読み取られるものが多い。

選び方などについて細かく説明されている。『社交知識 吾身の上の恥と損（ゼントルマン叢書第2編）』（加藤美侖・1922）では、「小笠原流」の礼儀作法を批判し、「……現代には現代の慣習があり、云わず語らずの不文律がある。その意味の礼儀作法は文化の物指である。紳士教養のメートルである。」と述べられている（序）。

「紳士」となる指南書の代表の一例として、『社交宝典斯くあれ』（1920）の内容を詳しくみてみよう。著者は、先に引用した『交際術修養』と同じ蘆川忠雄である。「紳士」、「淑女」という理想像について、主に、英米を参照し、箇条書きの構成で説明している。まず、「紳士」の「作法」は、「何処までも落着いて、丁寧で、立派な教育ある態度を保ち、凡俗の上に立つ」（2頁）ようにしなくてはならない。「談話」については、「紳士」は常識が大切であって、「一々沢山の専門の書物を読むことを要せ」ず、「近刊の新聞雑誌」を読んでおけばよい（20頁）。論争が避けられない場合は、「一步を譲って」おくのがよく、また、「自分のみ外国語に通じているというような態度」は他人を「愚弄」するようで、品性を疑われるので、すべきではない（27～9頁）。街頭、演説会などの公共の場所では、「自重心と善良なる教養」を発揮する態度が大切である（34頁）。また、婦人に席を譲るなどの振舞いについて、「女々しき行為」と感じられるかも知れないが、「今日欧米一般の礼法」である（38頁）。「服装」については、英米を参照しながら、「色彩の調和」（49頁）や「流行のスタイル」（53頁）に気を配ることが大切である、と説明される。「教養ある紳士」とは、「其の品性に於ても、其の風采に於ても卑しからず、人に対しては親切にして、行為は円転滑脱で、然かも能く人を畏敬せしむべきものがあり、又常に自己の感情を統御することを知り、下賤な行為を避けて、如何なる点から見ても恥しからぬ」（123頁）人物である、と言う。

これらの言説に想定されている「紳士」という人間像は、品位と自制心とを有する穏やかな人格の持ち主であり、専門知識だけではなく広い教養を有しており、テーブルマナーや洋服など、「西洋」の最新の文物や文化に詳しい人間とすることができる。

B-3 「半可通」・「気取る」・「かぶれ」

「西洋文化」の漸次的な浸透・定着に伴い、「西洋文化」を紹介するだけではなく、わずかな「差異」を強調する記述が増えてくる。「西洋」の文物は、誰にとっても未知のものであるが故に、（原理的には）平等に接近できるが、そこに、優劣の比較という視点が盛り込まれ、知識の少ない者を排斥するメカニズムが出現している。

この期間、頻出する言葉として、「半可通」・「気取る」・「かぶれ」がある。例えば、

「洋行紳士」でさえ、「半可通」の故に、「意外の非礼」や「滑稽」な振舞いをすることがある（石川義昌・1911・序文）、とされる。同様の意味合いで、「気取り」という言葉もよく使われる。『常識作法』（相島亀三郎・1918）には、「磊落を気取る不作法者」、「日本紳士の妙に気取った態度」、「人の前で髭をひねる人」などの項目がある。また、同書の、帽子に関する記述は以下のようなものである。少し長くなるが引用してみよう。

「西洋人は、チョット外出するにも、必ず帽子を被る習慣がある。所が我が国では、男子にして帽を被らずに外出するものが幾らもある。殊に田舎の人や商人などは、寧ろ帽を被ることを違例として居るといっても過言ではない……西洋人の批評であるが、日本の紳士は、概して帽子を深く被る癖があるといつて居る。著者の見る所では……寧ろ正しく被らぬものがあるといいたい。」（158～9頁）（下線引用者）

このように、特に、帽子やハンカチーフ、ステッキ、握手などの、洋風の文物や習慣を題材に、「西洋では……然るに我が国では……」式の記述が多く見られる。その際、例えば帽子であるならば、帽子を「単に被る」ことではなく、「正しく被っているかどうか」に焦点が当てられているのが特徴である。

『最新欧米礼儀作法 附録 欧米旅行案内』（立川文夫・1920）では、「文明人」であるかどうかの評価において、「日本人は中ブラリンの位置」（320頁）にあるとし、それを改善すべき問題と捉えている。そして、「外国かぶれとならぬこと 半可又は『四分の一』通とならぬこと」という項目が設けられ、「外国かぶれ」が批判される（327～30頁）。その際、「外国かぶれ」は、「真の外国通」に達しないものとして、「半可通」と似た意味合いで用いられている。例えば、「外国かぶれは比較的教養ある男女青年で三年以内外国に在る者に多い。」（328頁）（下線引用者）などと辛辣である。

「半可通」などと笑われる自体、「西洋文化」に対する知識の差異が、象徴的暴力として機能し始めた現れである。また、「西洋文化」を「差異化の原理」として用いるが故にという理由だけではなく、「日本人としてのアイデンティティを傷つける」が故にという理由からも、「西洋文化」の模倣への嫌悪感が表明されている。

3-2 まとめ

明治初期から中期にかけて、開化の必要から、翻訳の作法書が多数刊行され、「西洋文化」の導入が行われた。そして、明治後期から大正期にかけて、「B-1 交際術・成功術・人心看破術」としての礼儀作法書が多く存在したが、そうした作法書においては、「西洋」に関する知識の程度の差異が重要な役割を演じていた。B-1の作法書で理想とされる人間類型は如何なるものであったのかについて、「B-2 理想像としての『紳士』」で検討した。「B-3 『半可通』・『気取る』・『かぶれ』」では、この時期の作法書に顕著なキーワードについて検討した。これらの言葉の流行は、「西洋文化」の上流イメージへの浸透につれて、「排外」と「排外」という二つの感情の緊張関係が生じたことを示唆している。

特に、「交際術」・「成功術」を授ける作法書や「紳士」になるための指南書において、「西洋的」なるものが「差異化の原理」の一つとして作用してているのが注目される。また、「半可通」といった言葉の流布からは、「西洋」に対して同化と排除を志向するメカニズムが生成したことが分かる。もちろん、一般に「西洋文化」が浸透したのは後のことであるのだが、ここでは、礼儀作法をめぐる言説上において、理想像や上流イメージとして普及したという意味において述べている。もともと日本は、「外来文化の威信に支えられた価値体系をたてまえとして持っていた」[平川 1976: 37下段]のであるが、特に、明治後期から大正期にかけての礼儀作法書において、「西洋的」なるものを主軸に、常に「紳士」ではない者と差異化することにより維持可能であったという、「紳士」という表象の動態性・流動性が注目される。

4 おわりに

本稿では、明治期から大正期にかけての礼儀作法書を主な資料に、近代日本における「紳士」という理想的人間像がどのように形成され、「紳士」をめぐる如何なるダイナミクスが生じたかを見た。「西洋化」を象徴する具体的人間類型に注目することにより、「西洋化」の過程に関して、「単なる受容」から「『西洋』に関する知識が象徴的暴力として機能する『場』」[Bourdieu 1979=1990]の成立へと段階的に整理することができ、「西洋文化」が受容される際に作動する牽引のメカニズムについて明らかにすることができた。また、単に「西洋文化」や「近代的価値観」を装備すれば「紳士」という理想像に到達できるとは言えず、「紳士」という理想像が、「紳士」ではない者との「差異化」を図り距離を

取ることにより維持されたという動態的な性質が抽出された。「紳士」は、「西洋的」なるものを軸に同化・排除をめぐって展開する力学を具現化した存在とすることができる。

最後に、今後の課題について触れる。本稿では、憧憬の対象としての、あるべき「紳士」についてみたが、「紳士」は一方で、様々に揶揄・嘲笑される対象であった。「紳士」への反発や批判については、「3-1 礼儀作法書の分析——「西洋化」のプロセスの一つとして——」の「B-3 『半可通』・『気取る』・『かぶれ』」で触れたが、「紳士」批判のパターンや様々な否定的ヴァリエーションについて、より詳しい検討が必要である。批判のパターンのあり方から、逆に理想の「紳士」への対応を抽出することも可能であろう。これらの検討については、次の課題としたい。

主要参考・引用文献

- 相島亀三郎、1918、『常識作法』東京宝文館。
 蘆川忠雄、1909、『交際術修養』実業之日本社。
 ———、1920、『社交法典斯くあれ』至誠堂書店。
 石角春洋、1921、『人をチャームする応接の仕方』九段書房。
 石川義昌、1911、『欧米礼式』博報堂。
 上島長久、1903、『紳士読本』豊文堂。
 小笠原清務、水野忠雄、1883、『新撰立礼式』同源社。
 織田元子、1999、『ステッキと山高帽——ジェントルマン崇拜のイギリス』勁草書房。
 越智武臣、1966、『近代英国の起源』ミネルヴァ書房。
 加藤美侑、1922、『社交知識 吾身の上の恥と損（ゼントルマン叢書第2編）』朝香屋書店。
 鹿野政直、1969、『二 資本創出期における官僚的路線と民衆的路線の対決』中「3 市民的変革思想の観念論的展開」『資本主義形成期の秩序意識』筑摩書房、337-425。
 川北稔、1993、『洒落者たちのイギリス史——騎士の国から紳士の国へ』平凡社。
 川本静子、1973、『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』研究社。
 熊倉功夫、1999、『文化としてのマナー』岩波書店。
 交詢社編、1983、『交詢社百年史』交詢社。
 国立国会図書館図書部編、1994、『国立国会図書館蔵書目録 明治期第3編 社会科学』国立国会図書館。
 ———編、1998、『国立国会図書館蔵書目録 大正期第2編 社会科学』国立国会図書館。
 小峰和夫、2001、『明治期の男子職業移動の実態——「満洲紳士録」に基づくミクロ的考察』『日本大学経済学部経済科学研究所 紀要』30：85-108。
 佐伯富編、1975、『福恵全書語彙解』同朋舎。
 杉浦章介、1993、『戦前期東京「山の手」における階層分化と地域分化——「紳士録」データによる「上からの中流化」過程の分析』『慶応義塾大学日吉紀要 社会科学』4：1-77。
 園田英弘、1999、『近代日本の文化と中流階級』青木保他編『近代日本文化論5 都市文化』岩波書店、99-116。
 高橋達郎抄訳、1887、『泰西礼法』有隣堂。
 竹内里欧、2001、『近代日本における礼儀作法書の歴史社会学的分析——「欧化」と「国粹」の攻防』京都大学大学院文学研究科修士論文。
 ———、2002、『「欧化」と「国粹」——礼儀作法書のレトリック』『ソシオロジ』46（3）：127-43。
 立川文夫、1920、『最新欧米礼儀作法 附録 欧米旅行案内』隆文館。
 チェスターフィールド、首藤新三他訳述、1886、『欧米礼式』西川半次郎。
 永谷健、1992、『近代日本における上流階級イメージの変容——明治後期から大正期における雑誌メディア

- の分析」『思想』812: 193-210。
- ハウトン、北村金太郎訳、1886、『欧米礼式図解』北村金太郎。
- 波多野鳥峰、1908、『紳士と社交』実業之日本社。
- 平川祐弘、1976、『和魂洋才の系譜——内と外からの明治日本』河出書房新社。
- 平田玲子、1998、『近代日本の「紳士」と「書生」——テキストの中の風俗・思潮』『お茶の水女子大学人文科学紀要』51: 43-58。
- 藤岡洋保他、1995、『丸之内紳士録』大正11年版・大正15年版・昭和6年版に掲載された高級社員の居住地分布に見られる特徴——大正末期から昭和初期における東京の中産階級の居住地に関する研究』『日本建築学会計画系論文集』470: 235-42。
- 南博、1965、『大正文化』勁草書房。
- 他編、1986、『近代庶民生活誌⑨ 恋愛・結婚・家庭』三一書房。
- 宮本桂仙、1906、『西洋男女交際法』博文館。
- 村岡健次、1980、『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房。
- 他編、1987、『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房。
- 、2003、『ジェントルマン再論——歴史的な考察』『甲南大学紀要 文学編129 歴史文化特集』1-17。
- 安川哲夫、1995、『ジェントルマンと近代教育——〈学校教育〉の誕生』勁草書房。
- 山室信一編、1987、『マイクロフィルム版 明治期学術・言論雑誌集成 別冊』ナダ書房。
- 山本正編、2000、『ジェントルマンであること——その変容とイギリス近代』刀水書房。
- リットン、丹羽純一郎訳、1878→1972、『欧洲奇事 花柳春話』『明治文学全集 7 明治翻訳文学集』筑摩書房、3-109。
- 渡辺豊訳述、1879、『英国交際儀式』高浜徳。
- Ambaras, D. R., 1998, "Social Knowledge, Cultural Capital, and the New Middle Class in Japan, 1895-1912," *The Journal of Japanese Studies*, 24 (1) winter: 1-33.
- Bourdieu, P., 1979, 1982, *La distinction: critique sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (=1990、石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ、Ⅱ——社会的判断力批判』藤原書店。)
- Klapp, O. E., 1962, *Heroes, Villains and Fools*, (=1977、仲村祥一他訳『英雄・悪漢・馬鹿』新泉社。)
- Seidensticker, E., 1983, *Low City, High City Tokyo from Edo to the Earthquake*. (=1992、安西徹雄訳『東京 下町山の手』筑摩書房。)
- Weber, M., 1956, *Wirtschaft und Gesellschaft. Grundriss der verstehenden Soziologie*, vierte, neu herausgegebene Auflage, besorgt von Johannes Winckelmann, erster Teil, Kapitel III, IV (S. 122-80) (=1970、世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社。)

(たけうち りお・博士後期課程)

“Shinshi” as an Ideal Type : In Etiquette Books of Modern Japan

Rio Takeuchi

In this paper, I examine the “Shinshi” (= gentleman) as an ideal person who symbolizes “Westernization” and “modernization”, through a discourse of Etiquette books from the Meiji to the Taisho era. In particular I examine rhetoric, words and phrases which often appeared around “Shinshi”, focusing on extracting social dynamics around depictions of “Shinshi”. My analyses aim to clarify the mechanism of yearning and traction at work in the acceptance of Western customs.

From the beginning to the middle of the Meiji era, many translated Etiquette books were published. These addressed society’s needs for civilization and enlightenment, and served to introduce Western customs. From the late Meiji to the Taisho era, many Etiquette books were published which meant to teach how to succeed or how to associate with other people. In these books, familiarity with Western customs was important, and “Shinshi” was an ideal person embodying Westernization. As Western customs gradually spread, words such as “hankatsuu” (= smatterer) or “kabure” (= infected) were used as bantering insults, and trivial differences in knowledge of Western culture took on great importance. The spread of these words and phrases, along with a penetration of Westernized customs as a symbol of the upper classes, suggests the generation of a mechanism leading to assimilation to or exclusion from the “West”. “Westernized” became a principle of distinction, especially in the Etiquette books on success and textbooks for becoming “Shinshi”. “Shinshi” was the embodiment of this mechanism for assimilation or exclusion around an axis of Westernization.

In this paper, I examine a concrete image of a personal type symbolizing Westernization to help clarify the mechanism for acceptance of Western customs. These aspects of Westernization receive insufficient attention in those previous works which treat Westernization as simply a unilinear process.